

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01961

研究課題名(和文) 宗教的人種化の社会的条件 ネイションと他者化のダイナミズムー

研究課題名(英文) Sociological Conditions of Religious Racialization: Nation and Dynamics of Othering

研究代表者

鶴巻 泉子 (TSURUMAKI, MOTOKO)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70345841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：「移民がもたらした社会問題」として争点化されたイスラムは、フランスでは国家の価値規範に関わる政治テーマと認識されるのに対し、スペインでは地域ごとの個別争点となっている。フランス側カタルーニャでは、カタルーニャ性称揚はフランス性の補完でありかつ個人のエスニックな属性として現れ、ムスリムとカテゴライズされた人々を分断するのに対し、スペイン側では、カタルーニャ主義が移住者包摂の公式の文化的イデオロギーとして、積極的に強調されている。しかし、文化実践ではなく政治実践を見ると、「ムスリム」たちは地域政治の「正統なメンバー」とは見なされず、カタルーニャ主義の担い手とはなっていないことが窺われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マイノリティ・ナショナリズム研究、地域主義研究の中で、カタルーニャは頻繁に研究の事例とされる一方、スペイン・フランス両側のカタルーニャを分析し、その中での移住者の包摂とカタルーニャ性の関連を比較する研究は殆ど存在しない。国民国家を単位とする従来の伝統的研究視角に、本研究の国境を越えた比較を加えることで、移住者を取り巻く様々な社会的相互作用や、各国ごとの「イスラム」表象の差異、そして現在の西欧社会における国民社会の多層化と変容について、新しい分析視角が開かれると思われる。この事例研究を通して、地域主義研究と移民研究双方を繋げる新しい分析視点を提案できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The Islam that has been politicized as a "social problem brought by immigrants" is perceived, in France, as a political theme related to the values and norms of the Nation, while in Spain, it becomes individualized issues specific to each region. In French Catalonia, the promotion of Catalan identity serves as a complement to French identity and appears as an ethnic attribute, potentially creating divisions among those categorized as "Muslims". In Spanish Catalonia, Catalanism is actively promoted as an official ideology of inclusion. However, when examining political practices rather than cultural practices, it becomes clear that those categorized as "Muslims" are not regarded as "legitimate members" within regional politics and are not becoming carriers of Catalan nationalism.

研究分野：社会学

キーワード：国境地域 移民研究 ムスリム移民 マイノリティ・ナショナリズム カタルーニャ カタルーニャ主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、スペインとフランスにまたがる二つのカタルーニャ地域を例に、北アフリカ系住民に対する「宗教的人種化」のメカニズムを比較するものである。異なる国家に属しつつも、独自性を主張する「カタルーニャ主義 catalanisme」(Fradera 2010)を持つそれぞれの地域で、北アフリカ出身の人々がどのような文脈により集団として人種化されるのかを分析する。宗教的要素を通じた他者化のプロセスが、国家ナショナリズムと対抗ナショナリズム、そして両者の紛争性に規定される仕方に特に注目し、ネ이션再構成と再国民化メカニズムの一側面に光を当てていくことを目的とする。

本研究の出発点は、二つの研究潮流だった。すなわち、①西欧少数地域の移民問題と、②イスラム圏出身の移民やその子孫の包摂／排除研究である。前者の西欧少数文化地域の移民問題については、特に2000年代以降から多くの研究が行われている(Guibernau 2007; Madibbo 2006)。マイノリティ・ナショナリズムは、国家のナショナリズムから差異化を図る必要から、エスニック的性質が強く過去回帰的で、移住者に対しては閉鎖的性質を持つという疑いが向けられてきた(Hepburn 2009)。しかし逆に一部の地域については、少数文化は文化的生き残りをかけて移住者を積極的に同化していかなければならないという必要性から、国家のナショナリズムよりもよりシヴィックでインクルーシブな性質を持つことが指摘されてきた(Zapata Barrero 2009)。本研究で事例とするカタルーニャは後者のカテゴリーとして知られてきたが、それではカタルーニャ地域をフランスとスペインのそれぞれの国家との関係において比較した場合にはどのような傾向が見られるかが、問題となろう。

本研究のもう一つの出発点は、急増するムスリム移民研究に関連している。第二次大戦後に西欧に流入したEU域外の移民の一部はフランスやスペインの北アフリカ系、イギリスのアジア系、ドイツのトルコ系などイスラム圏の出自であった。これらの移民やその子孫に焦点を当てた研究は、ヨーロッパへの「イスラムの移植」という問題意識と共に、1980年代以降に大きな注目を集めるようになる。そして近年、ヨーロッパではポピュリズムの高まりや「再国民化」の傾向(高橋・石田:2016)が見られる中、イスラムを排斥する言説や実践も目立って増加している(Allen 2010; Sayd & Vakil 2010)。1980年代以降に本格化する、西欧のイスラムに関する社会科学的研究は、具体的分析単位に国民国家の単位を指定することが一般的であるが、それでは受け入れ社会として地域レベルを考えることは可能だろうか。地域社会は、ムスリムを他者化する極右の言説や、国家レベルでのナショナリズムの言説とどのような関係を結ぶのかが注目される。

2. 研究の目的

上記のような問題関心をふまえ、両地域のカタルーニャ性をめぐる言説と実践が、特定移民を「ムスリム」として他者化するコンテクストを、国家との関係の中で考えることがこの研究の目的である。カタルーニャ主義が政治的性質を帯び、国民国家ナショナリズムと対立関係にある場合(スペイン)と、逆にそれがまったくの文化的主張として捉えられ、むしろ国民国家のナショナリズムと親和性がある場合(フランス)ではどのような違いが現れるか。これらの問いに答えることによって、現代の西欧におけるマイノリティ・ナショナリズムと他者化のダイナミズムの変容について考えることが、本研究の狙いであった。

3. 研究の方法

Morgan & Poynting (2013)らは、現在、イスラムと暴力を結びつける表象が国境を越えて広がっていることを指摘し、そのグローバルなリスクの意識が、その土地に固有の社会関係の「読み直し」を通じて根付くことに注意を促す。本研究は、このようなローカルな文脈におけるイスラム表象とナショナリズムの交差に注目し、具体的には①国民国家、②地域社会、そして③他者化される個人の側から人種化のメカニズムとコンテクストを分析する予定であった。しかし、2年半に及ぶコロナ禍の中で、調査予定を大きく変更する必要に迫られ、結果として研究のデザインそのものを変更する必要が生じた。

すなわち、本来は他者化プロセスの複合性を見るために、地域社会と当事者側について質的調査を行う予定であったが、それを諦める代わりに、①国民国家にとっての歴史的なイスラム表象の文脈と②ムスリム集団についての研究の変遷に大きく焦点をあてた。他方では、③カタルーニャ主義と移民統合の言説と、④地域史の中での北アフリカ特にモロッコ系の人々の移住史とその社会表象を、メディア報道とを辿りつつ、検証した。

4. 研究成果

(1) フランスとスペインにおける「ムスリム移民」カテゴリー

フランスとスペインにおいては、西欧の他の多くの国と同様、EU域外からの移民流入とイスラムを同時に問題視する言説が1990年代以降に目立って増加してきた。しかし、フランスにおいてはすでに19世紀半ばから比較的大きな移民の波が何度かあり、北アフリカ系の移民が目立って増加したのは第二次大戦後の高度経済成長期と、石油ショックによる経済移民受入停止に激増した家族合流をきっかけとしてであった。それに対してスペインは内戦とその後のフランコ独裁期間における難民流出や、長い経済移民の伝統を持ち、移民受入国に転じたのはごく最近の2000年代以降に過ぎない。この時期に急激に国内に流入したのがモロッコ系移民であり、その後2010年代以降から、イスラムに敵対的な政党結成や、伝統的な保守政党PPによる移民の政治争点化が見られるようになった。

現在スペインに居住するムスリムはおよそ200万人、人口の4%と言われ、そのおよそ半数がスペイン国籍だと言われる(Observatorio Andalusi 2019)。それに対し、フランスではアメリカのシンクタンクが572万人、人口の8.8% (Pew Forum 2017) と推定する。しかし信仰や肌の色等のエスニックな指標について、公的な調査を禁じている両国では、宗教に関わる公的なデータが(ほぼ)存在しないだけでなく、基本的概念そのものが複合的な問題を孕んでいる。多くの研究が依拠する「ムスリム」の数値は「信仰」の主観的評価や内容を問う調査から得られたのではなく、人口調査を出発点とした移住者の出身国を元にしたデータであることが多い。つまり、移住者あるいは当該国で生まれた子の親がイスラム圏出身であれば、「ムスリムと前提」されるのである。背景には、イスラムは「国外」からもたらされ「受け継がれる」という発想、つまりイスラムの外部性やイスラム圏の同質性、世俗化の困難、強いエスニックな紐帯の発想があると言えるだろう。親がイスラム信仰だったとしても次第にその文化や宗教から離れる人や、そもそもイスラム圏における宗教マイノリティであった人々、あるいは本人も両親も移住を経験していないけれども改宗した例、などの存在は、想定されていない(あるいはさして重要性をもたないとして切り捨てられる)のである。

もう一つの問題は、このような文化と宗教の同一視の中でムスリムをカウントするとは、とりもなおさず「旧植民地出身者の血を引くものを数え上げる」ことに他ならない点である。フランスの移民政策や行政についてK. Kateb(2005)が行政の統計を事例に、そしてF. de Barros(2005)が住居政策を例に実証したように、植民地アルジェリアの「ムスリムフランス人」として扱われた人々は、フランスへの移住後は「移民」というラベルを貼られることとなった。現在の「ムスリム」をめぐる大きな議論は、これらの「移民」の子孫が再び「ムスリム」カテゴリーに戻ったという見方も可能であろう。

しかし多くの宗教学者が指摘するように、現代宗教における信仰は、伝統的な社会集団との関係で理解されるものではなく、個人によって「選び取られる」という性質を持つ。Danièle Hervieu-Léger (2000) が言うように、人々は宗教の中に生まれ落ちる時代は終わったのであり、若者が信仰するのは自分自身が選び意味づけたイスラムである。宗教は集団に呼応するのではなく、人々が個人として非常に多様な「信仰する行為 croire」を行うのである。現代の宗教においては、集団としての同質性があらかじめ担保されるようなエスニックな母体や、信者のコミュニティとしての「ムスリムコミュニティは存在しない (Roy 2015)」のであり、「(同質的成員のコミュニティを前提とした) ムスリム主観性は存在しない(Ramirez y Mijares 2018)」と言えよう。

(2) イスラムと移民を問題化する先行研究：スペインとフランスにおける人種化をめぐる研究と議論

フランスでは1990年代から人種差別行為についての研究が増加しはじめ、特に2000年代になってからはイスラムを取り巻く差別が社会で大きな争点となっている。大きく3つの研究潮流がある。すなわち、①植民地主義と共和国主義の歴史の中でイスラム差別を論じる研究、②イスラムを具体的なエスニック集団と切り離して論じる統計的手法を採る研究、③イスラムを問題化する社会と、そのようなコンテクストの中で「ムスリムとして生きる経験」の相互作用を問う研究である。

風刺画事件を事例にイスラム問題の「ヨーロッパ化」を指摘するMiera & Sala Pala(2009)は、フランスの特徴は、イスラムの問題が常にネイションのあり方をめぐる議論、社会の規範的価値(ライシテ、共和国主義への挑戦)をめぐる問題についての議論となり、移民の存在や彼らの社会への統合、植民地主義をめぐる問題として議論されないという特徴があると指摘する。イスラムをめぐる問題が政治化しやすい状況の中で、フランスのイスラムをめぐる問題は社会的排除の問題の他に、植民地主義や奴隷制などをめぐる共和国の記憶を問題化する。そしてその記憶の問題は共和国の規範であるライシテ(世俗性/宗教分離)をめぐる価値の論争とも関わる。国家のあり方そのものが問われる形となる。

しかし逆説的ではあるが、このように政治化しやすい争点であるからこそ、植民地主義と結びついた特定の集団(北アフリカ系の人々)を概念的に切り離すために、統計的な手法を用いて「純粋に宗教的な被差別要因」を把握しようとする一連の研究も存在する。このような、エスニック

な背景を持たない「抽象化されたムスリム」の分析は、主に人口学者によって行われているが、このような操作は理論的には可能であるが、社会学的現実の中では説得力を持ちづらい。ある個人が北アフリカ系であれば、そのことは植民地の記憶を想起させ、彼の宗教が注目を集める状況を作り出すのである。当事者が自己を「ムスリム」として定義すれば、それは必然的に、既に社会問題化されたムスリムの表象と向き合っていくことを意味する。

このような、社会学的実在としての個人やその日常的な実践、経験に目を向けた研究が、三つ目の研究潮流である。ムスリムであること、が、性や年齢、出自などのような属性や階層を越えた徴となり、集合的次元の潜在的基礎となる (Hajjat et Mohammed, 2014) 事実をふまえ、たとえば Talpin et al. (2017:33) は、「マイノリティ化された状況はどのように個人の実践や集団の動員に結びつくのか」という問題に向き合う。

それに比べ、スペインではイスラムや増加するムスリムの存在が国家や社会全体の規範や価値観を左右する問題という認識は存在しない。スペインが移民受入国へ転じた歴史が比較的最近 (2000 年代から) であるために、移民の歴史が長いフランスに比べ、移民研究も、第二世代によるイスラム信仰を扱う研究も、遅れて始まっている。スペインにおける北アフリカ系の人々の人種化は、大きく 2 つの研究テーマに分類できる。すなわち、①「歴史的他者」としてのムスリムと、②「新しい移民問題の客体」としてのムスリム、である。スペインではフランスと異なりイスラム問題は直接に移民の存在に結びつけられる。それをめぐって、スペインにはイスラモフォビアは存在せず、スペインのナショナルな神話と関わる、伝統的な「モロフォビア」が存在するのみ (Zapata Barrero & Díez-Nicolas 2013) という指摘がある。ムスリムによるイベリア半島の侵略とレコンキスタ、モリスコらの追放というスペイン史の 1 ページは、隣国モロッコとの関係を通じて存続し続け、1990 年代末から 2000 年代にかけて本格化するモロッコからの移民流入によって再び想起され、言及されるようになったという。しかし、②の研究者たちは逆に、「モロフォビア」が頻繁に言及されるようになったのはむしろ 2000 年代以降、移民が社会問題となってからだ」と指摘する (Ramírez 2016)。社会の集合的記憶を「ムスリム」を介して移民と結びつけることで、モロフォビアが継続的性質を持つような錯覚を持たせ、伝統と記憶を再構成しているのだ、と。このようにモロッコ移民への反感を「伝統」のフレームから再解釈し、それを新たなイスラモフォビアと関連づける議論は、近年になって急激に増加している (López Bravo 2011; Ramírez 2014)。特に制度的なイスラモフォビアに関して、フランス社会と同様の排除のメカニズムも指摘されている (Ramírez 2016; Mijares Molina, Lems y Téllez Delgado 2018)。

このように、フランスと比較したスペインの特徴の一つとして、フランス国内の議論からの影響と、一部の争点の共通性 (Ramírez (ed) 2012; Joanna M. Lems 2000) が挙げられる。スカーフ着用や女性の地位をめぐる問題、世俗性とイスラムのテーマ、ムスリムを対象とした差別をめぐる研究などがそれである。他方、両者の大きな違いとして、スペインの場合は議論や分析の単位がセウタやメリリヤ、マドリド州やカタルーニャ州、アンダルシア州など、(モロッコ系移民が多く居住する)「地域」ごとの研究が一般的である点である。スペインにおける近代国家の発展は、政治の中心と経済の中心との乖離と、内戦の経験によるナショナルな記憶の分断という複雑な歴史を辿った。そのためスペインという国家との関係においても、宗教や信仰実践においても、移民包摂の政策内容においても、自治州の間には非常に大きな差異が存在する。

それに対し、フランスではフランス革命以来の中央集権的文化やライシテの思想が深く根付いている。移民研究一般においても、実証的な研究は「都市 (あるいは「大都市の郊外」)」を分析単位とする場合が圧倒的である。そしてそのような研究は、都市の独自性を考慮しつつも、常に「フランス社会全体の縮図」としての位置づけがなされる。ローカルな特異性、文脈性は、分析の際に考慮される対象とはなっても本質的には「事例の一つ」という枠を超えることはないのである。

(3) カタルーニャ主義の複数の次元と移住者の包摂

中央集権文化がフランス人意識と共に周辺地域にまで及ぶフランスにおいては、このカタルーニャ地域においても、国境の向こう側を見るときには「経済的に遅れたスペイン」についての眼差しが向けられてきた (Dukic 2014)。地域の伝統的言語である「カタルーニャ語」に対する愛着は存在したものの、その言語は「農民の文化」と蔑まれ、自分達を「カタルーニャ人」と自称したり、地域を「カタルーニャ」と呼んだりすることは、一部の活動家を除いて非常に稀であった。ところが、そんな中でも細々と続いてきたカタルーニャ主義運動への「公的な支援」が 1990 年代から生まれると、カタルーニャ文化への肯定的評価が広く起こってきた。1990 年代以降地域内で高まる「カタルーニャ主義」は、一方ではスペイン側カタルーニャの経済成長、文化的知名度の上昇、また政治的自治要求運動に触発された。そして他方ではフランス側の地方自治体の観光戦略に影響を受け、外部からの投資を誘発するための文化戦略としての側面を持った。スペイン側の、国家との対抗関係に特徴付けられた「カタルーニャ主義」とは違い、フランス側カタルーニャ主義は国家や地方自治体との協働を前提している。それはフランスの一地域であるカタルーニャ地域の「文化運動」であり、「土着の」「フランスの」文化を価値付けるものという了解が存在する。その意味で、その思想は外部からの移住者を地域社会に包摂するためのイデオロギ

一とはなり得ず、むしろ極右政党の宣伝に利用される可能性を持った (Hillel 2015)。
したがって、地域の独自性をアピールし、それを企業誘致や観光資源としようとする行政の思惑は、地域内の伝統的な政治的クライアンテリズムの元では、住民の分断の要素として働く一面もあった。そもそも国境地域として歴史的に人々の大規模な移動が繰り返されてきたこの地域 (Tarrus et al. 2013)では、スペインの内戦の際には数十万の政治難民を受け入れた。第二次大戦時にはユダヤ人、ロマ人が地域内の収容所に収容され、その後は旧植民地アルジェリアから「帰還した」数十万の植民者「ピエノワール」、フランス側で独立戦争を戦ったアルジェリア人兵士「アルキ」、アルジェリアやモロッコからの経済移民、スペイン側カタルーニャ出身のジタン(ロマ)、アンダルシア地域出身のジタンなどが次々にやってきて定住した。このようなモザイクのような「コミュニティ」が短期間に定住を進めると共に、地域内での社会的政治的分断が刻まれていく。このような状況のもとで公式の「カタルーニャ主義」を称揚することは、すなわち、(移住者ではなく)土着の人々を正統化し、その文化を保護していくという宣言としても受け止められ (Hillel op.cit.)、「カタルーニャ人であることのエスニック化」とムスリムの特別視 (Yassine 2014) にも繋がったのではないかと。

スペイン側では、カタルーニャ主義は分断を生み出す文化や価値というよりは、積極的にニューカマーを社会に包摂していくための原理として公に宣言された。しかし興味深いのは、カタルーニャ主義は国境を越えたフランス側との連帯を生み出すような運動としては考えられず、あくまで「スペイン国内の一地域としての運動」として機能した、という点である。

(フランス側カタルーニャを指す)「北カタルーニャ」という用語は定着せず、フランス側においても、スペイン側においても、公共空間でその名称を目にすることはほぼ無いのである。両地域の主張するカタルーニャ主義とは、両地域がユーロリージョンとして公式の提携関係にあるとはいっても、現実のトランスナショナルな実践空間を形成する要素とはならず、むしろ各地域がそれぞれの国家内部で「国家に対して」存在するための基盤の一部だと言える。

フランス側に比較してスペインの大きな特徴は、フランスが国家レベルでイスラムを問題化するのに対して、スペイン側では地域単位で異なる対応を見せることだった。たとえばスカーフ着用をめぐる問題も地域間で大きな差があるが、カタルーニャはマドリッドと並んで、教育機関におけるスカーフ着用を問題化した、数少ない地域であった。カタルーニャはスペインの中でも信仰の表出に関して相対的に不寛容と位置づけられる。というのも、スペインにおけるアル・アンダルス Al-Ándalusの歴史はスペイン国家遺産の一部と見なされ、一般に女性のスカーフ着用にも社会はフランスに比較してやや寛容あるいは無関心であるのだが、カタルーニャでは内戦の際にカトリック教会がフランコ派となった経緯や、歴史的にフランスの世俗主義に大きな影響を受けたことから、急進的カタルーニャ主義は厳格な政教分離を主張している。

そしてその一方では、公式の「移民統合のためのカタルーニャ主義」が存在し、カタルーニャで働き、生きる人は全てカタルーニャ人であるといった言説が流布される。しかし他方では、モスク建設やスカーフ着用はもとより、モロッコ系の人々や外国人一般に関して、住宅や職場での待遇をめぐる構造的な差別が存在することが次第に明らかになっている。言語実践におけるカタルーニャ語の使用のような日常実践のカタルーニャ性は、すでに多くの移住者やその子孫の包摂に成功しているが、政治運動におけるカタルーニャ主義は、これらの人々の中に正統なカタルーニャ人を見出すには至っていないと言える。

マイノリティ・ナショナリズム研究、地域主義研究の中で、カタルーニャは頻繁に研究の事例とされる一方、スペイン・フランス両側のカタルーニャを分析し、その中での移住者の包摂とカタルーニャ性の関連を問う研究は殆ど存在しない。フランス側については「フランスの一都市」の移民研究の事例として扱われることが多く、またスペイン側については、そのボーダーリージョンの側面は軽視される。しかし、国民国家を単位とする従来の「方法論的ナショナリズム」と呼ばれる伝統的研究視角に、本研究の国境を越えた比較を加えることで、移住者を取り巻く様々な社会的相互作用や、各国ごとの「イスラム」表象の差異、そして現在の西欧社会における国民社会の多層化と変容について、より新しい分析視角が得られると思われる。この事例研究を通して、地域主義研究と移民研究双方を繋げる新しい分析視点を提案できると考えられる。

主要な引用文献

- Mijares Molina, et al. (2018). Constructing Subaltern Muslim Subjects: the Institutionalization of Islamophobia. *Revista de Estudios Internacionales Mediterráneos*, (24).
- Abdellali Hajjat et Marwan Mohammed (2013/2022). *Islamophobie. Comment les élites françaises fabriquent le problème musulman*, La Découverte.
- Ángeles Ramírez [ed.](2012). *La alteridad imaginada El pánico moral y la construcción de lo musulmán en España y Francia*, Edicions bellaterra.
- Julien Talpin et al.(2017), *L'islam et la cité. Engagements musulmans dans les quartiers populaires*, Presses Universitaires du Septentrion.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鶴巻泉子	4. 巻 12
2. 論文標題 スペインの「スカーフ論争」：ヨーロッパ化と国内の文脈の間	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Autres	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴巻泉子	4. 巻 11
2. 論文標題 「イスラモフォビア」とナショナルな文脈化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Autres	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴巻泉子	4. 巻 10
2. 論文標題 北カタルーニャカルシヨンか？ フランス・カタルーニャ地方から見た言語と境界	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Autres	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鶴巻泉子
2. 発表標題 宗教的人種化とナショナルな文脈
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------